

## 要旨

### 発表題目

「破来頓等絵巻」成立に関する一考察—遊行七代・託何の関与を想定して

中村ひの

本発表の目的は「破来頓等絵巻」テキストとイメージの成立に、時宗教学大成者、七代遊行上人・託何(1285-1354)が関与した可能性を想定、その妥当性を判断することである。「破来頓等絵巻」は、鎌倉期(14世紀)成立と目される徳川美術館所蔵《破来頓等絵巻》(以下、徳川本)を現存作例とする詞書4段、絵3段から成る一卷の説話絵巻である。詞書と絵の段数不一致は欠落や錯簡ではなく、成立当初からと考えられ、大谷大学図書館蔵「破来頓等絵巻」(大谷大学本)など近世以降成立の伝本にもこの不一致が踏襲されている。したがって、徳川本は「破来頓等絵巻」原本に相当し、それ以外は徳川本模写との位置づけになる。

しかし、成立段階から段数がずれている徳川本の状態がいかんが生じたかは改めて検討すべき問題である。先行研究では、徳川本各段の場面転換の唐突さや矛盾も考慮して、テキスト『破来頓等物語』及び対応するイメージは絵巻と異なる画面形態で成立し、徳川本段階で絵巻物になったために矛盾が生じたと推察した。その上で、この先行作例が掛幅の説話絵だとすれば、教導的な詞書の内容も含め絵解きを想起させると論じている(山本泰一「「破来頓等絵巻」について—一時宗教義の絵画化—」『金鯰叢書』15号、1988年 徳川黎明会)。掛幅から卷子へ作品形態を変更した結果が「破来頓等絵巻」だとすれば、本作の矛盾点の多くが説明できるため、指摘は一定の説得性を有していると考える。他方、この物語は何のために成立したのか、そしてなぜ掛幅から卷子へと画面形態を変更した上で描き継がれたのかについてはいまだ議論が及んでいない。

本発表ではこうした状況をふまえ、従来とは異なる方向性のアプローチを試みる。すなわち、時宗側から本作の成立を検討する視点である。まず、徳川本の成立年代は14世紀と目されており、同時期の時宗における指導者として、託何が相当する。さらに、教団史上、教学大成者と位置付けられる託何の著作は二祖・他阿真教『同行用心大綱』の注釈書『同行用心大綱註』、信徒の生活規範を定めた『東西作用抄』、教学書『器朴論』『仏心解』等多岐にわたり、和讃も伝わる。この点から託何が教団内に限らない広範な仏教知識を持っていること、だからこそ教学面から教団を発展させたことがうかがわれよう。『破来頓等物語』もまた、時宗に特徴的な仏教観を顕在化させつつ、それだけに限定しない広範なコンテキストから成り立っている。ゆえに、その成立に託何に関与したとすれば、少なくとも状況的には大きく矛盾する点はない。また、作品形態の変更にも何らかの託何の意図があったのではないだろうか。

以上の視点から「破来頓等絵巻」の成立に対する託何の関与を仮定し、徳川本を中心に絵と詞書の様態を検討する。本作において指摘されてきた時宗の関与を、より具体的な様態として理解するための手がかりを得たい。(本文 1,177字)